
7番に入ります。

茉白

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

7番に入ります。

【Nコード】

N4413BA

【作者名】

茉白

【あらすじ】

おはようございます

こんにちは

こんばんは

それからはじめまして。
ある日わたしは落ちました。

pixivにも茉白というハンドルネームで同じで小説を書いています。

無断転載ではありません。

プロローグ

夏川弥咂は14歳だ。

中学生で、容姿端麗という訳でも、頭脳明晰というわけでもない平凡な14歳である。

14歳と言えば、某有名な巨匠の漫画である鶏の頭をもつ天才科学者の話が有名であり、14歳という映画もあるらしい。

しかし一般的に14歳とは中途半端だ。

せめて切りのいい15歳になってからこんな事が起こればいいのに。

ふと夏川弥咂は思った。

これは夢だ。

じゃなきゃこんな事ありえない。

彼女は変な所で現実主義者だった。

幽霊も信じるし、魔女、雪女、妖怪の類いも非科学的な事も信じる。しかし、自分の周りで起こる事はないと盲目的に信じ込んでいるのだった。

よってこんな非現実的な事が起こるのは夢だ。夢。

これが彼女の言い分である。

しかしながら、これは彼女の予測…別の言い方をすれば願望であるが、それは大外れであり、今あつてることは正に現実だった。

「……いつまで落ちればいいんだろう。」

十数分前、彼女はいきなり穴に落ちた。

それから未だ底に着くこと無く彼女は落ち続けている。

試しに両手を広げてみたが壁どころか何の感覚もなかった。

普通なら風を感じるはずだが、下から風が吹くこともなく、下を見ても一瞬の光さえもなかった。

とにかく不自然なことばかりだ。

下に目を向けて見えるのは自分の布のスニーカーと膝小僧だけだった。

それ以外は闇である。地面は勿論見えない。

分かるのは自分が落ちているという事だけで、それも解るといふより、それは全て直感と言った方が正しい。

もう彼女の頭はぼんやりしてきた。とりあえず、ここから脱出することしか考える事ができなくなっていた。

今底があれば即死は免れないが、この前落ち続けるよりましだ。

それが今この夢から覚める唯一の方法だと頭が呆けてきた彼女は考えている。

そんな彼女はこう毎回考えずにはいられなかった。

どうしてこうなったのか。どうしてわたしが落ちなければいけないのか。

わたしは全く身に覚えがない。誰か教えるか起こすかしてくれ。

彼女は頭を抱えて唸った。

しかし、彼女のこの疑問が解消されることは遥かに先のことである。

彼女には落ちることしかできなかった。

1 おはようございます

「どうしてこんな所に人が落ちてくるかねえ。」

朦朧とした意識の中でぼそりと聞こえた声は柔らかくて何処か冷たくて、聞いた事なかった声だった。

でも今は声が聞いた事あるうが無かるうがどうでもいい。

わたしはまだ眠っていたかった。

浮き上がりかけた意識を引っ張り戻してまた眠ろうとする。

「おじよーさん。」

本当に喧しい奴だ。

わたしは今眠たいのに。

「ねえ、おきてますー？」

頼むよ。

わたし何故かなり眠い上にやたら心労が溜ってるんだよ。
寝かせてお願いだから。

「また落ちる夢みちゃうぜ？」

その一言で頭が覚醒した。

落ちる？

夢？

やっぱりあれは夢だったのか。

そうだな。あんな十数分も落ちる落とし穴があってたまるか。

上半身を反動で起こし、周りを見ようとしたが、頭に衝撃が走った。

「だっ!!」

「いつ!!!」

痛すぎる。

第一なんだこれは。

目を瞑ってる為になかなかつた。

打った所を押さえ、薄く瞼を開くと、緑と焦げ茶色の影がみえた。

「...?」

だんだんと目を開いていくとぼやけた視界が綺麗になっていく。

綺麗な視界には草原があった。

それも見渡す限り緑しかない。

緑の中に勿論人はいない。

だとしたらさっきの茶と声はなんだったのだろう。

幽霊?

まさかまさか。

いたとしてもわたしの近くにはいないし。

妖精?

まさかありえないでしょ。

わたしのまわりでそんな不思議が起こるわけない。

「お嬢さんそりゃないよ。」

下から声が聞こえた。

さっきわたしが寝ていた時に聞こえてきた声が。

ふと下を見てみると、灰色の塊が見えた。端からちらちら見える焦

げ茶はさっきの焦げ茶だ。

だとしたらこいつは人間か。

ちらちら見える焦げ茶は髪なのか。

「お嬢さん。」

また奴は蹲ったままわたしをお嬢さんと呼んだ。お嬢さんとか言わ

れたの初めてで、気恥ずかしくて顔が上気する。

顔さえ分からない人にお嬢さん呼びかよ。

「...顔上げて。」

ふつと灰色が動いた。

灰色はフードだったらしい。

焦げ茶の髪が一閃して、ぱちくりとした黒目がわたしを映した。わたしも奴をじっと見た。

顔、雰囲気はどちらも中性的で男と取るには目が可愛い。

かといって女と肯定するのは憚られる。

しかし、その首は確かに男のもので、その手はしなやかでありながら確かに骨張っていた。

「お嬢さん。なにかいいなよ。」

お嬢さん

もう一度言って奴は不服そうに口を閉じた。

わたしが返事をしないのが不服らしい。

こんな男はさておき、わたしはこんな場所を知らなかった。

そもそもわたしの学校は所謂都市校だ。

ビルや民家が林立する中にこんな草原があるだろうか。いや、ない。それならばここは何処だろうか。

現実的に考えるなら、誘拐とかだろうか。可能性に一番有得る。

それはわたしが可愛いから、とかではなく一般的な見解であつてわたしの見た目が麗しい訳では無い。

念を押すようだが、わたしの顔は整っていない。だとしたら誰が。

勿論心当たりなどさっぱりない。今足元にいる男とも、関わりは無い。

「あの、」

「ん？どうした？」

長らく暇していたのか、奴はすぐに返事をした。
わたしが話しかけるのを待っていたらしい。

「ここ、何処ですか。」

「ここはね、エイってとこ。」

奴はにこりと目を細めた。

エイとは海鷗魚と書くあの魚のことだろうか。
変な地名もあったものだ。

しかしわたしが知らないだけかもしれないが海鷗魚なんて地名をわたしは聞いた事が一度も無い。

要するに、ここはわたしの知らない土地だ。

「エイ……」

復唱してみるとやはり変な感じがする。

わたしは今何処にいるのか。

それさえも分からない。

そして現時点でわかるのは海鷗魚という変な地名と自分の事だけだった。

下で蹲っているこの男のことさえ分からない。

「お嬢さんお嬢さん。お困りですか？」

「は？」

奴は形のいいアーモンド型の目を少し細めて所謂『いいひと』の目をした。

しかし、その実情は楽しんでいるのだと思う。

自分がこいつの立場ならこんな状況を楽しむなんぞもっての外だが、こいつならこんな情況にわざわざ首をつっこんでいきそうだ。

しかし奴とわたし以外誰もいない此処でその上此処が何処かもわからないのに、わたしは誰を頼れというのだろう。

「ねえ、そんな深く考えなくていいよ。」

絶妙である。

これを自覚して言ったのなら。こいつの腹黒さに舌を巻くが、これを素で言ったのなら、素で人を思い遣る事ができる人間として素晴らしく思う。

しかし、もうそんなことはどうでもいいのだ。

結果的にわたしは今困っている。

それが事実だ。

「
…
…
…困ってる。」

ぼそりと呟いた時に奴はアーモンド型の目を完全に伏せて、綺麗な笑顔を作ってみせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4413ba/>

7番に入ります。

2012年1月12日18時51分発行